



生涯学習課では、遺跡発掘調査や出土品の整理・収蔵・展示などについて、多くの市民の方々に活用していただけるような取り組みを実践しています。今回の特別ミニ展示は、阿賀野市教育委員会、梅護寺（ばいごじ）からご協力をいただいて市立図書館（本館）で開催しています。

* 祝！新元号「令和」決定

新しい元号に「令和（れいわ）」が決まりました。これは、日本の古典「万葉集」の梅花の歌三十二首の序文である「初春の令（よ）き月、空気は美しく、風は和やかで、梅は・・・」から「令」と「和」の2文字を引用したものです。

日本では、「花」と言えば桜（サクラ）ですが、古くは「梅（ウメ）」のことを指しました。阿賀野市の文化財には、この梅と関係の深いものがあります。今回は梅を中心に、市内遺跡から出土した「ウメ」・「モモ」の種、梅護寺の「八ツ房の梅」についてご紹介します。

* 遺跡から出土した「ウメ」・「モモ」の種

「ウメ」はバラ科サクラ属の落葉樹で、「桃（モモ）」や「サクラ」とはイトコの関係にあります。市内遺跡ではこれまでに2遺跡で「ウメ」の種が出土しています。

平成28・29年度に調査した村北遺跡（福田）では、7世紀後半～10世紀代（約1300～1000年前）の川跡が見つかりました。川底からはたくさんの木の実や種子が出土しました。そのなかに「ウメ」の種1点が含まれていました。また、平成14年度に旧京ヶ瀬村教育委員会が調査した土居内西遺跡（駒林）では、9世紀前半（約1200年前）の溝の中から「ウメ」の種の破片2点が出土しています。（追加調査で、石船戸遺跡（13世紀）で2点あることがわかりました）

一方、「モモ」の種は市内遺跡からたくさん出土しています。飲み水を得るための重要な施設であった井戸など水に関わる場所から出土することが多くなっています。平成30年度に調査した蕪木遺跡（堀越）では、9世紀前半の集落に隣接して水田耕作を行っていた痕跡が見つかりました。水の調節を行う溜井（ためい）と呼ばれる穴です。この穴の中から、須恵器のうつわ5点とともに「モモの種」2点が出土しています。

「ウメ」や「モモ」は中国から伝わり、古代の人びとに食用のほかにも薬としてもさかんに用いられていたようです。きっと1000年前の阿賀野市には梅や桃の木がたくさん植えられ、雪解けの季節には紅白の花が咲いていたことでしょう。



ウメの種（村北遺跡）



須恵器・モモの種・木の実（蕪木遺跡）

梅護寺の「八ツ房の梅」

浄土真宗の開祖親鸞聖人（しんらんしょうにん）は、1209（承元 3）年に京ヶ瀬の小島に滞在しました。このときに親鸞聖人の真弟子になった廣橋忠則が開いたお寺が梅護寺です。新潟県内には親鸞聖人に関連する植物・生物の伝説があり、それが越後七不思議として知られています。梅護寺の境内には、このうちの2つ、「八ツ房の梅」と「珠数掛ザクラ」があります。

「八ツ房の梅」は、一つの花に八つの実を結ぶめずらしい梅です。親鸞聖人が梅干しの種を庭に植えて歌を詠んだところ、翌年には芽が出て、枝葉が茂り、薄紅色の美しい八重の花が咲き、実が八つなるようになったと言い伝えられています。毎年、4月中旬ころが梅の花の見ごろで、5～6月くらいに実が見られるようになります。なかなか八つの実を見つけることは難しいですが、チャレンジしてみてください。

梅の花・実も見応えがありますが、正面の門の石柱は必見です。石柱には、墨でたくさんの文字が書かれています。「會津（あいづ）、越中（えっちゅう）」などのほかに「大阪玉造（おおさかたまつくり）・・・」などの地名も見えます。また「文政七年（1824年）」と書かれているものもあります。江戸時代の旅人が、お寺を参拝した際に残した落書きであると思われます。



梅護寺の八ツ房の梅、門柱に残された文字（撮影協力：梅護寺）

「令和」が引用された「万葉集」の序文は、約1300年前の730（天平2）年、九州の太宰府長官であった「大伴旅人（おおとものたびと）」が開催した「梅花の宴（ばいかのえん）」のようすを記述したものであると言われています。

阿賀野市も1000年以上も昔から梅との深い結びつきがありました。梅護寺では「八ツ房の梅」がちょうど見ごろの季節です。5月初旬には「珠数掛ザクラ」も満開を迎えます。

みなさん、新しい元号「令和」の春に、ぜひ市内の歴史散策に出かけてみませんか。